

大学の中国語教育における通訳トレーニングの実践例と その効果に関する考察¹⁾

関 光 世

目 次

- 0 はじめに
- 1 授業の概要
 - 1.1 対象及びその学習ニーズ
 - 1.2 教室活動
 - 1.3 課題, 試験及び評価方法
- 2 通訳トレーニングの授業における展開
 - 2.1 シャドーイング練習
 - 2.2 内容把握練習
 - 2.3 リプロダクション練習
- 3 学生の反応と効果についての考察
 - 3.1 学生の反応
 - 3.2 観察される効果
- 4 まとめ

キーワード：通訳トレーニング, シャドーイング, 内容把握, 背景知識, 日本語口頭表現

0 はじめに

近年, 外国語学習においてコミュニケーション能力の向上が重視されるのに伴い, 通訳トレーニングを応用した中国語学習のためのテキストが急速に増え, 大学においても通訳トレーニングを導入した科目が開設されるようになった。

筆者は通訳・翻訳の基礎知識に関する講義と通訳トレーニングを導入した初歩的な実践練習を行う授業(科目名は「中国語コミュニケーション論」, 以下「コミ論」)を担当しているが, 大学における授業という枠組みの中で通訳トレーニングを行うに際し, どのような制約や問題点が存在するのか, またどのような教育効果が期待できるのか, より効果的な授業を行うために, どのような方法や工夫が必要か, など多くの点について, 特に中国語教育においては未だまとまった報告は少ない²⁾。本稿では, 「コミ論」における通訳トレーニングの実践内容を紹介し, その中で観察された学生の反応と教員の反省点を踏まえ, 大学の授業で通訳トレーニングを導入する場合の外国語学習における効果について考察し, より効果的な授業とするための方策について模索したい。

1 授業の概要

1.1 対象及びその学習ニーズ

筆者が担当する「コミ論」は外国語学部専門教育科目に属し、通訳という職業について一定の知識を得るとともに、各種通訳トレーニング方法を実践しながら自身の中国語によるコミュニケーション能力を高めることを目的として開設された。本科目は3年次以上の学生を対象としており、中国語学科³⁾の学生にとっての選択必修科目であると同時に、一部のフレキシブルカリキュラムに登録した他学部生にとっては必修の科目となることもある⁴⁾。

授業では春学期に一般のビジネス通訳を、秋学期には司法の分野における通訳を意識した実践練習を行うため、履修にあたっては一定の中国語運用能力が必要である。従ってシラバスでは中国語検定3級合格以上を履修条件としているが、必修科目となる学生もいるため、徹底できないのが現状である。

履修者数は10名～20名（平成22年度春学期は26名）で、その所属、履修動機、学習歴、中国語のレベルを簡単にまとめると下表1のようになる⁵⁾。「中国語学科生」の中には留学経験者が若干名含まれる。「法学部生」とは司法外国語プログラム⁶⁾登録生で、「その他」は中国語学科と司法外国語プログラム登録生以外を指し、中国人留学生や中国での生活経験があるなど特殊な言語背景を持つ場合が多い。22年度春学期を例にとると履修者は中国語学科生16名（うち5名が留学経験者）、法学部生8名、その他2名（うち1名は中国人留学生）の計26名であった。

履修動機を聞くと、「通訳になりたい」と望む学生は僅かで、リスニングに対する苦手意識が強く、「リスニング力を伸ばしたい」「話せるようになりたい」という理由が一般的であった。またほとんどの学生が通訳及び通訳トレーニングの経験を持たない。「具体的に何をするのかかわからないが、通訳トレーニングをすれば、きっと中国語が上達するに違いない」と、漠然と期待しているにすぎないことが伺える。

中国語学科生と法学部生では1,2年次における学習時間に差があり、学生の平均的なレベルも異なる。中国語学科生の中には1年以上の長期留学経験者も含まれるため、レベルの差はさらに大きく感じられる。中国語のレベルが最も高いのは「その他」のグループであることが多い。このグループは、数は少ないが通訳という仕事をより身近に感じているせいか、モチベーションも比較的高いのが特徴である。

表1 「コミ論」履修生の概要

所 属	履修動機	本学における 中国語学習歴	平均的なレベル
中国語学科生	単位のため 中国語が上達しそう	週5科目×2年	中国語検定 3級合格程度
法学部生		週4科目×1年 + a ⁷⁾	中国語検定 4級合格程度
その他	通訳に関心がある 就職に役立てたい	—————	中国語検定 2級合格以上

以上から、本科目は通訳トレーニングを実践する科目としては学生数が多く、レベルの差も大きいこと、履修者の学習ニーズが通訳技術の向上ではなく通訳訓練をとおして中国語の運用能力を向上させることにあることがわかる。

さらに、田中（2004）、永田（2006）で指摘されているのと同様、学生の語学力と通訳トレーニングで求められる語学力との差が大きい点は否めない。本来なら通訳トレーニングには早すぎると思われる学生であっても、履修した以上は途中でドロップアウトせずに修了できるよう指導しなければならない。大学の授業であればこそ、そのための工夫が不可欠となる。

1.2 教室活動

本科目ではシャドーイング、内容把握、リプロダクションの三種類の通訳トレーニングを採用した。それぞれの具体的な学習手順や目的については次節で詳しく述べる。

毎回の授業はウォーミングアップ→内容把握練習→シャドーイング練習→リプロダクション練習の順に行う。

全ての練習において音声によるアプローチを主とする点が、本科目最大の特徴であり、学生にとっては最も新鮮な点である。授業ではまず音声のみを使用し、練習後に文字原稿を配布する。学生が授業中に精神的苦痛を感じて挫折するのを防ぐ目的で、初回授業の際に、学期中に使用する全ての音声教材をあらかじめ配布しているが、通訳能力を正確に判断するためには、初めて聞く内容を通訳させるのが望ましいので、予習は要求せず、復習を重視することを伝えている。

授業はLL教室でヘッドホンを使用して行う。ヘッドホンを使用することで外界と遮断され、学生の集中力が維持しやすくなると同時に、全員が同時に声を出して練習することが可能になり、学習効率が格段に高まる。さらに教員が各学生の声を自由に聞くことができるため、学生に「いつ自分の声を聞かれているかわからない」という緊張感を与えている。授業中は基本的に全員が同じ音声を聞いて一斉に練習するのを教員が一人一人聞いていく。学生の精神的苦痛に配慮して、個別に通訳させるのは極力控えるよう心がけている。

1.3 課題、試験及び評価方法

前節で述べたように、学生のレベルの差が大きく、本来通訳トレーニングは早すぎると思われる学生も履修するため、本科目では出席と授業中のパフォーマンス（通訳練習の最中に教員が学生の声を聞いた時の出来）を重視し、加えて毎回の課題の完成度と期末の口頭及び筆記試験の成績を総合して成績を評価することになっている。

課題は前回の授業で配布された内容把握教材の文字原稿⁸⁾（スクリプト）の日本語訳の完成と、音声教材を使ったシャドーイング練習及びリプロダクション教材⁹⁾の暗記で、授業の冒頭でウォーミングアップを兼ねて前回の音声を流し、全員一斉にシャドーイングと通訳練習（日本語⇔中国語）を行いながら、教員が一人一人の声を聞き、どの程度練習したか、暗記が十分できているかを聞き取り、完成度を判断する。内容把握教材の日本語訳は適宜発表或いは提出させている。

学期末には口頭試験と筆記試験を行う。出題範囲は既習の音声教材と配布したスクリプトのみで、口頭試験は授業時と同様のトレーニングをすでに使用した教材を用いて再度行い、そのパフォーマンスを教員が一人一人聞いて評価する。筆記試験は配布したスクリプトで既出の単語や文から出題し、単語のピンイン表記を正確に憶えているかどうかと復習の度合いを確認するための補助的なものと考えている。

2 通訳トレーニングの授業における展開

2.1 内容把握練習

内容把握練習とは、ニュースのようなまとまった情報を聞いて、その内容を日本語で要約するというものである。このトレーニング法を採用した理由は、第一に通訳の全プロセス、つまり聞いて理解する（リスニング）、続いてそれを頭の中で保持する、最後に目的言語に置き換えるという3つのプロセス全てを実践することができることにある。第二に聞きとれた範囲でまとめることを要求するので、通訳練習よりも学生の負担が小さい、第三に、状況に応じて通訳練習や文字を見ながら訳すサイトトランスレーションなどその他の練習も行える、第四に、背景知識や日本語の重要性、あるいはメモの取り方など、通訳の備えるべき語学力以外の技能についても言及できる、などの理由による。内容把握練習は、履修者のレベルによって学習内容を調整することが比較的容易な総合練習と位置付けることができる。

この練習の目的は①中国語の一般的なナチュラルスピードに慣れる、②背景知識¹⁰⁾を動員¹¹⁾する、③日本語の口頭表現力を鍛える、④通訳に際して情報の取捨選択ができるようになる、の四点にある。

使用する教材は、30秒から1分程度のラジオの中国語ニュース¹²⁾で、練習の具体的な手順は以下のとおりである。

	教員の指導		学生の作業
ステップ1	ヒントの提示	→ヒアリング2回	→ キーワード発表
ステップ2	キーワードの整理と確認	→ヒアリング2回	→ 要約の発表
ステップ3	空欄付き文字原稿配布	→ヒアリング2回	→ 空欄を埋める
ステップ4	文字原稿を見ないで	→ヒアリング2回	→ 要約の発表
ステップ5	文字原稿を見ないで 完全原稿配布	→シャドーイング	

資料1は北京オリンピックの水泳で北島康介が金メダルを獲得したというニュースである。事前に「北京オリンピック」というヒントを与えて学生に回想させ、背景知識を動員する準備をしてから音声をも2回聞いてキーワードを発表してもらおう(ステップ1)。次に、学生が挙げた「水泳」「北島康介」「世界記録」などのキーワードをもとに当時を思い出しながら、さらに2回聞いて要約する。(ステップ2)。これを何度か繰り返したあとで、空欄付きスクリプト(資料1)を配布し、さらに数回聞きながら空欄を埋める(ステップ3)。その後文字原稿を見ずに再度聞いて改めて要約を発表する(ステップ4)。ここではこれまでの記憶が背景知識の動員を助ける役割を果たす。最後に文字原稿を見ないでシャドーイングし、完全なスクリプト(資料2)を配布して(ステップ5)、次回までに日本語訳を完成させ、ピンインを確認してシャドーイング練習を繰り返し行っておくよう伝える。

2.2 シャドーイング練習

シャドーイングとは、耳から聞こえてくる音声に合わせて遅れないように復唱する練習で、リスニングから理解までの速度を速くし¹³⁾、正しい発音や自然なイントネーションを習得するのに有効であると言われるトレーニング法である。

履修生はリスニングに対する苦手意識が強いため、まずは初級教科書のようなゆっくりで棒読みの中国語から脱却し、自然な発話速度に慣れることと、中国語の自然な発音とイントネーションを身につけることを目的として採用した。内容把握教材をそのまま教材として使用している。

シャドーイングには文字原稿を見ずに行うプロソディシャドーイングと、文字原稿を十分に理解した上で、これを見ながら音読するコンテンツシャドーイングの2種類を採用している¹⁴⁾。

プロソディシャドーイングは前節の内容把握練習のステップ5として行うもので、この段階では学生はまだ内容の理解が不十分で、読めない単語もあるため、トーンやポーズに注意を払いながら、全体的なイントネーションを感覚的に真似ることに集中させる。一方コンテンツシャドーイングは前回の内容把握練習の教材を用いて、授業の冒頭のウォーミングアップと同時に課題の完成度を聞く目的を兼ねて行っている。課題としてすでに日本語訳を完成し、1週間の

練習期間があることが前提であるため、音声と文字を一致させながらシャドーイングすることで、「聞いて理解する」というリスニング段階の総合的な練習となる。

2.3 リプロダクション練習

リプロダクションとは聞いた情報を理解して頭の中で保持し、起点言語のまま再生する練習で、目的言語に置き換える通訳練習より学生の負担が小さく、履修者のレベルや状況に応じて通訳練習に発展させることが可能であり、さらに集中力を高めることができ、また短文の選択において常用表現や慣用句を取り入れることで、語彙を増やし、表現力の向上につながるという利点がある。

教材には、春学期はビジネス通訳、秋学期は司法関連の常用表現を集めたオリジナル教材を作成している。日本語と中国語の対訳で毎回15センテンスである。(資料3参照) 具体的な練習の手順は以下のとおりである。

まず日本語で、次に中国語で一文ずつテープを止めて復唱する。負荷をかけるには、センテンスとセンテンスの間でテープを止めず、録音されていないわずかなブランクを利用して復唱させる方法がある。学生の様子を見ながら、さらに負荷を加え、日本語から中国語、中国語から日本語への通訳練習に発展させることも可能である。

3 学生の反応と効果についての考察

3.1 学生の反応

授業では文字に頼らず音声を使ったアプローチを主とするため、学生は文字教材がないことによる不安と90分間集中力を維持して授業に参加しなければならない緊張感に加え、何時自分の声を教員に聞かれているかわからないというプレッシャーにさらされる。そのため、授業全体の印象については、「緊張する」、「疲れる」と言う声がよく聞かれるが、その一方で、「時間のたつのが速い」、「飽きない」、「割と楽しい」というポジティブな意見もあり、新しい学習方法に対する好奇心と、リスニングの苦手意識克服への期待感が感じられる。しかし社会人¹⁵⁾と比べると、学習への取り組みが積極性に欠ける点は否めない。

通訳トレーニングに関しては、一部の学生から「難しくついていけない」という声が聞かれる。やはり中国語検定3級合格に達していない学生にとっては非常にハードルが高いようだ。練習中に集中力が切れ、ヘッドホンをはずして放棄してしまう学生もいる。このような「諦め」を生む原因は、おおむね①発話速度に対する拒否反応、②題材への無関心、の二点である。

初回の授業で内容把握練習の音声を聞かせると、「速すぎて無理」、「留学もしていないのに、聞き取れるわけがない」と絶望感が漂う。リスニングに対する苦手意識の根底には速さに対する拒否反応があり、しかも彼らの多くは、これを克服するには留学して慣れるしかないと考え

ているようだ。シャドーイング練習が言語処理の反応速度の向上に役立つことはほとんど知られていない。

内容把握教材を使ったプロソディシャドーイングでは、最初は全く声の出なかった学生が、次第に途切れがちで発音も曖昧だが、何とか声を出せるようにはなる。コンテンツシャドーイングは1週間の準備期間があり、単語の意味や日本語訳を十分復習したという前提で行っているにも関わらず、観察していると全体的にプロソディシャドーイングの方が、声がよく出ている印象がある。

また学期の終盤になると、シャドーイングについて「自分は上達しているか？」という質問を受けることがある。シャドーイングの効果や上達度の判定は非常に難しく、今後の課題でもあるが、学生は目に見える、はっきりとした効果を期待している。

また内容把握で取り上げる題材によっては、学生の積極性に大きな違いが観察される。一般的に政治、経済に関するものは集中力が続かない。逆にサッカー、オリンピック、四川大地震などのニュースには明らかに「理解しよう」という意欲を見せる。特に数字や国名など、聞き取る対象が明確になると、さらに積極性がアップするといった現象が観察された。内容把握練習の目的の一つに「背景知識の動員を実感する」を挙げたが、当初はほとんどの学生はその意味するところがわからず、単語に意識を集中して理解しようとするあまり、全体が見えず、要約が困難であった。そこで、キーワードを提示し、関係する事柄を記憶の前面に引き出す準備作業をした上で再度聞くという、前節で述べたステップ2を繰り返し行ったところ、「スペイン、サッカー……“皇家马德里足球俱乐部”…ああ、レアルマドリッドだ!」「“克・罗纳尔多”、“转会费”……そうか、ロナウド、あ！移籍の話か!」と言うように、自らの記憶や既存の知識と結び付けながら次第に要約が形になってくる。すると「次は聞きとるぞ」と俄然意欲を見せ始め、教室が活気づく。時に連想ゲームの様相を呈するが、学生が本科目を「割と面白い」「飽きない」と感じるのは背景知識の動員を実感できた時の新鮮な喜びと大いに関係していることが見て取れる。

また、練習を進めていく中で、「日本語が難しい。」と言う学生が出てくる。例えば“美国总统奥巴马”を「アメリカ総統オバマ」、「アメリカ大統領のオバマさん」と訳す学生がいる。日本語の表現力も通訳にとっての重要な資質であることを説明し、いつも見ているテレビのニュースを思い出させると、「アメリカのオバマ大統領」と言い直す。次第に、通訳における日本語力の必要性を痛感し、日本語の表現に注意を払う学生が増えてくる。

3.2 観察された効果及び考察

以下に、授業をとおして観察できた学生の変化と学習効果についてまとめる。

第一に、最大の変化は日本語の音声表現である。授業ではテレビのニュースをイメージし、「音声で聞き手に明瞭に情報を伝える」という点を意識させる。すると、「～みたいなあ…」と

いった若者言葉や関西弁、いかにも訳しましたという「だ、である」調が消え、声も大きくなり、明瞭になる。同時に不要な代名詞¹⁶⁾や不自然な数量詞が消えて、日本語訳の質も向上した。

内容把握練習の教材として日本のニュースを中国語に翻訳したものを採用したことで、学生自身が日本語をイメージしやすく、通訳に必要な語学力には母語も含まれることを実感させ、日本語の表現力の向上に注意を向けさせるのに役立っている。日々のニュースに注意を払い、ニュースで用いられる日本語の表現を意識して日本語訳を行わせることは、長期的には多方面にわたる背景知識の形成と、外国語能力の基礎となる日本語能力の向上にも有効であることがわかる。

第二に、内容把握練習では、学期の中盤になると、いかにも聞きとれなかった部分を、類推・想像で補ったとわかる誤訳が見られるようになる。例えば“内陸城市成都の一名30多岁的男性已经被确诊为感染新型流感。”(「内陸部の成都で三十過ぎの男性1名が新型インフルエンザに感染したことがわかりました。）」という中国語を、「四川省の都市成都で、留学帰りの¹⁷⁾男性が新型インフルエンザに感染した。」と訳したのは、内容把握練習の目的の一つである「背景知識の導入」の意味を理解し、これを試みている表れだと言うことができる。半年の授業では、通訳技術の向上までは確認できないものの、トレーニング法の趣旨を理解し、方法に習熟するには十分であると言える。

第三に、シャドーイングの効果については、残念ながら現段階では半年間の授業で反応速度の向上や発音・イントネーションに明らかな変化を観察するには至っていないが、最初は声が出なかった学生が、次第に、途切れがちで発音も曖昧だが何とか声が出るようにはなる。民間の通訳学校において¹⁸⁾は一学期の間に反応速度が明らかに向上する受講生もいる。自分で進歩を実感できた受講生も少なくない。シャドーイングの効果の検証は今後の課題だが、いずれにしても外国語学習の早い段階で「速さ」に対する拒絶反応を取り除くことができれば、中国語話者との交流や留学にも積極的に取り組めるようになり、長期的には教育的効果があると言えるだろう。

4 まとめ

以上の考察を踏まえて、大学で通訳トレーニングを採用した授業を行うに際し、より学習効果を高め、意義のある授業を実現するために必要な点についてまとめてみたい。

通訳トレーニングは、最低限の語学力と知識がなければ効果がないと言われる(染谷2001)¹⁹⁾が、大学の授業に導入しようとするならば、学生の語学力の不足²⁰⁾、背景知識の不足、モチベーションが希薄である、通訳トレーニングに関する知識と経験に欠ける、時間的な制約(半期15回で何が出来るか)がある、履修者の人数やレベルに応じたクラス分けなど臨機応変な対応が困難である、などは避けられないことで、これらを問題点として捉えるのではなく、前提とし

て充分考慮した上で、カリキュラムをデザインすべきである。

①「諦めさせない」ための工夫

通訳トレーニングを行う授業では、語学力の差が授業中のパフォーマンスに如実に表れ、履修者全員の知るところとなるため、語学力が不十分な学生にとっては苦痛となる場合があることに留意しなければならない。授業を成立させ、効果的に運営し、かつ途中で脱落させないためには、学生の新たな学習法に対する好奇心をやる気に変え、その意欲を持続させて、積極的に参加したいと思えるような授業を実現することが重要である。そのためには全ての面において、一般的な「飽きさせない」に加えて、特に「諦めさせない」工夫が必要である。

②学習の目標と重点

学生の学習ニーズや時間的な制約を考慮して、科目の到達目標は通訳技術の向上ではなく、あくまでも外国語能力の向上に置くべきである。通訳トレーニング法を学習方法のひとつとして紹介し、学生が最低限必要な知識を獲得し、これらの方法に習熟するよう指導する。その中で、中国語の自然な速さに慣れること、背景知識の動員を実感させること、日本語の口語表現力の向上、の三点に重点を置くのが現実的である。

従って、トレーニングの柱は内容把握練習とその教材を使用したシャドーイング練習をとするのが妥当であると考ええる。

学生が将来的に通訳を職業として希望した時に、自力で出発点に到達できる知識とトレーニング法の実践経験を身につけておくことの教育的意義は十分に大きいと考える。

③成績評価

学生の人数が多く、レベルの差も大きいことから、統一の基準で履修者全員の能力を比較することはできない。出席と授業中のパフォーマンスを重視する以外に、学生の上達度、習熟度に焦点を当てた評価方法が必要とされる。

④教材の選定について

学生の年齢や社会経験を考えれば、その背景知識が質・量ともに社会人に遠く及ばないのも無理はない。諦めずに聞こうとする意欲と集中力を持続させるためには、通訳に必要な各分野の背景知識の強化を追求して教材を選定するのではなく、背景知識を一般的な常識や中国理解と考えるにとどめ、学生の関心が高く身近に感じることのできる題材を幅広くタイムリーに取り上げる努力が必要である。

⑤教室活動における工夫

授業での実践をととして、背景知識の動員を実感できた時の喜びが、学生の積極性やモチベーションの維持に大いに役立つことが分かった。従って練習前の準備段階として単語を提示するなど、背景知識を事前に補い、動員する準備を整える工夫が必要である。これによってより円滑かつ効率的に練習を進めることができると同時に、学生により達成感を感じさせることが可能になる。

以上筆者の「中国語コミュニケーションE・F」におけるわずかな経験をもとに、大学における授業の中で通訳トレーニングを導入し、学生の語学力を効果的に高めるための工夫について考えをまとめてみた。これらを参考に今後はより詳しく学生の声を調査しながら本科目をより効果的なものとするために工夫を重ねて行きたい。科目の性質上効果の客観的な測定が難しく、現段階では担当教員の主観的判断に頼らざるをえない。またシャドーイングの効果の検証及びその効果を実感させる方法の模索や内容把握練習における適切で効果的な背景知識の事前提示の仕方の検討など、課題も少なくない。しかし、履修対象者の特性に合致した教材選定、柔軟な教室活動の展開、現実的な目標設定及び評価などによって、大学教育における通訳トレーニングの導入は、学生の一般的な社会常識の形成、中国語学習に対するモチベーションの維持と強化といった短期的な効果のみならず、将来にわたるキャリア形成といった長期的な教育効果も期待できることは間違いない。

注

- 1) 本稿は2010年6月に桜美林大学で行われた中国語教育学会第8回全国大会における発表のための予稿の内容を加筆・修正したものである。
- 2) 中国語に関しては永田(2006)がある。
- 3) 中国語学科の学生数は一学年60名。1,2年次に「インテンシブ中国語A～E」を修了し、3年次以降はさらに実力を伸ばすべく「コミ論A～P」から8単位以上を履修することになっている。
- 4) 一部のフレキシブルカリキュラム(「司法外国語プログラム」)の登録者にとっては「コミ論」は必修科目であり、「外国語ステップアッププログラム」の中国語に登録した場合、「コミ論」は中心科目として履修しなければならない14単位の中に含まれる。いずれも制度上は全学部の学生の登録が可能である。
- 5) ここに述べる学生の中国語学習歴、資格、履修動機等は、履修にあたって行った簡単なアンケート調査の結果に基づく。
- 6) 司法外国語プログラムとは、本学がワンキャンパスの強みを生かして実施するフレキシブルカリキュラムの学部融合プログラムのひとつで、法学部・法務研究科と外国語学部が共同で2007年に設置した。司法通訳人や外国語に通じる警察官の養成が主な目的で、現在のところ中国語のみを対象としている。学部レベルでは日本初の試みである。
- 7) 司法外国語プログラム登録者は、1年次に「中国語エキスパート」(週4コマ)を履修し、2年次にはプログラムの中心科目としてさらに「中国語エキスパート発展A/B」や「検定で学ぶ中国語」などの科目を適宜選択し履修する。
- 8) 資料2を参照されたい。
- 9) 資料1, 2を参照されたい。
- 10) 「背景知識」とは、広い意味では染谷(2001)の「知識ベース」と同様、発話内容の理解のために必要な知識を指す。ただし本稿では対象が大学生ということもあり、「一般的な知識・常識」と理解するにとどめる。
- 11) 「背景知識を動員する」とは、リスニングの際に、自己の持つ背景知識を瞬時に活用し、理解に役立てることを指す。豊富な背景知識を備え、かつこれを瞬時に動員できることは通訳の重要な能力の一つである。
- 12) NHKワールド、ラジオ日本の中国語ニュースを使用している。発音が標準的で速度がほぼ一定である、日本のニュースを中国語に翻訳して放送しているので、日本で見聞きしているニュースを思い出

- させることで、背景知識を動員しやすい、日本語表現に意識を向けやすいなどの利点がある。
- 13) 門田 (2007) では「外国語を音声で聞いてから理解するまでに要する時間を「内語反復速度」と呼んでおり、シャドーイングの効果の一つに「内語反復速度の効率化」が挙げられるとしている。
- 14) コンテンツシャドーイングとプロソディシャドーイングの方法や効果については門田 (2007) に詳しい。
- 15) ここで言う「社会人」とは民間の通訳学校の生徒を指す。筆者は民間の通訳学校でも通訳養成クラスを担当しているが、仕事上の必要に迫られて門をたたく生徒も少なくない。彼らの積極性と本科目の履修生のそれとは雲泥の差がある。
- 16) 人称代名詞の処理が中文日訳の際のポイントの一つであることはよく指摘されている。日本語では人称代名詞は多用しない。例えば「我妈不让我去看我女朋友。」は日本語では「母がガールフレンドに会いに行かせてくれないんだよ。」が自然だ。
- 17) 当時日本国内のニュースでも「アメリカ留学から日本経由中国に帰国した 30 代の男性が機内で発熱した」というニュースが繰り返し報道され、記憶に残っていたと思われる。また「成都」は四川省の省都であるため、「内陸都市」(内陸部の都市) が聞きとれず四川省を連想したのだろうと推測できる。
- 18) 社会人対象の通訳者養成講座の学習時間は $120 \text{ 分} \times 18 \text{ 回} = 2160 \text{ 分}$ 。「コミ論」は 1 セメスターで $90 \text{ 分} \times 15 \text{ 回} = 1350 \text{ 分}$ である。
- 19) 染谷 (2001) は通訳訓練の 3D モデルを使って、通訳に必要な三要素 (語学力、知識ベース、通訳技能) の関係を説明する中で、英語の場合英検準 1 級、TOEIC800 点に満たないと「どうやっても通訳訓練にはならない」と指摘している。
- 20) 田中深雪 (2004) のほか、実際に通訳クラスを担当する教員から「語学力不足で通訳訓練にならない」と聞くことも少なくない。

【参考文献】

- 門田修平『シャドーイングと音読の科学』コスモピア株式会社 2007
- 田中深雪「通訳訓練法を利用した大学での英語教育の実際と問題点」『通訳研究』第 4 号 2004 日本通訳学会
- 染谷安正「通訳教育のあり方—何を教えるか、何を学ぶか」『通訳・翻訳ジャーナル』2001 年 8 月号 (pp. 98-99)
- 永田小絵「獨協大学外国語学部言語文化学科の中国語教育における通訳訓練法の応用」『外国語教育研究』第 24 号 2006 獨協大学外国語教育研究所 (pp69-99)

【資料 1：内容把握教材 空欄付き原稿】

中国語コミュニケーション論 E

第三回 内容把握

(トラック 5)

北岛康介蝉联百米蛙泳冠军

今天上午，北京奥运会①_____了男子 100 米②_____决赛。日本选手北岛康介以 58 秒 91 的③_____勇夺冠军，一举打破④_____纪录。自上届⑤_____奥运会之后，北岛康介成功蝉联百米蛙泳⑥_____，这也是 76 年来日本选手在游泳个人项目上首次蝉联冠军。

北岛赛后表示，“⑦_____的时候有点力不从心，因此今天前半段⑧_____游得比较⑨_____。到后半段时，和昨天的⑩_____不同，能明显感觉到身体有余力，于是就拼出⑪_____，放手冲刺”。

他还表示，“对我来说奥运会还没有⑫_____，希望 200 米⑬_____也能赛出好成绩”。

【単語とフレーズ】

- | | | | |
|---------|-------|---------|-------|
| ① _____ | _____ | ⑦ _____ | _____ |
| ② _____ | _____ | ⑧ _____ | _____ |
| ③ _____ | _____ | ⑨ _____ | _____ |
| ④ _____ | _____ | ⑩ _____ | _____ |
| ⑤ _____ | _____ | ⑪ _____ | _____ |
| ⑥ _____ | _____ | ⑫ _____ | _____ |

打破记录 _____

上届奥运会 _____

蝉联冠军 _____

力不从心 _____

后半段 _____

放手冲刺 _____

赛出好成绩 _____

【資料 2：内容把握教材 完全原稿】

中国語コミュニケーション論 E

第三回 内容把握

(トラック 5)

北岛康介蝉联百米蛙泳冠军

今天上午，北京奥运会举行了男子 100 米蛙泳决赛。日本选手北岛康介以 58 秒 91 的优异成绩勇夺冠军，一举打破世界纪录。自上届雅典奥运会之后，北岛康介成功蝉联百米蛙泳冠军，这也是 76 年来日本选手在游泳个人项目上首次蝉联冠军。

北岛赛后表示，“半决赛的时候有点力不从心，因此今天前半段故意游得比较放松。到后半段时，和昨天的半决赛不同，能明显感觉到身体有余力，于是就拼出全力，放手冲刺”。

他还表示，“对我来说奥运会还没有结束，希望 200 米蛙泳也能赛出好成绩”。

【日本語訳】

【資料3 リプロダクション教材】

中国語コミュニケーション論F

第一回 リプロダクション

- | | |
|-------------------------|-------------------------------|
| 1. 请您再说一遍。 | もう一度言ってください。 |
| 2. 请您大声一点。 | もう少し大きな声をお願いします。 |
| 3. 请把腰带解下来。 | ベルトをはずしてください。 |
| 4. 请把眼镜摘下来。 | めがねを取ってください。 |
| 5. 你说真话好不好？ | 本当のことを言ってもらえませんか？ |
| 6. 你使劲想想。 | よく思い出してください。 |
| 7. 请你配合我们的调查。 | 我々の調査にご協力をお願いします。 |
| 8. 请在名字的下方盖章。 | 名前の下に押印してください。 |
| 9. 首先请您填一下这张表。 | まずこの用紙にご記入ください。 |
| 10. 请您在合同书上签名，盖章。 | 契約書に署名捺印してください。 |
| 11. 你愿意带我们到现场吗？ | 我々を現場に案内してもらえますか？ |
| 12. 能不能跟我们到办公室去一趟？ | 事務所まで御足労願えませんか？ |
| 13. 给我们看一下您的手臂好不好？ | ちょっと腕を見せてもらえますか？ |
| 14. 让王老师的爱人来听电话，好吗？ | 王先生の奥さんに電話をかわってもらえますか？ |
| 15. 这里有从一到五的号码牌，请您抽出一张。 | ここに1から5までの番号札があります。1枚ひいてください。 |

The consideration for practical examples and the effect of Chinese interpretation training at the university level

Mitsuyo SEKI

Contents

- 0 Preface
- 1 The outline of the class
 - 1.1 Students and their learning needs
 - 1.2 Classroom activities
 - 1.3 Homework, examinations and evaluation
- 2 Method for practicing interpretation
 - 2.1 Shadowing
 - 2.2 Summarization
 - 2.3 Repetition drills
- 3 Results
 - 3.1 Student reaction
 - 3.2 Observed effect
- 4 Conclusion

Keywords : Interpretation training, Shadowing, Summarization, Background knowledge, Oral Japanese expression